

## なぜNGO（国際民間協力団体）なのか（2）

アジア医師連絡協議会  
代表 菅波茂

NGO（国際民間協力団体）の真の意義は広義では国家間の正式な外交関係が無い時にも国際協力が実行できることです。狭義では国民がNGO（国際民間協力団体）を通して国際協力に直接参加できることです。

今回考えてみたいのはNGO（国際民間協力団体）を通しての国際協力への参加がどの程度現実化しているかということです。意識のある若い世代が必死でNGO（国際民間協力団体）活動を支えて、多くの国民は遠くから被害を被らないように見ているのが現状だと思います。なぜこうなったのか冷静に分析する必要があります。

日本でのNGO（国際民間協力団体）の歴史を1979年のカンボジア難民救援活動を境に分けることができます。1979年以前のNGO（国際民間協力団体）活動は主としてキリスト教関係者によって熱心に行なわれていました。1979年以後はキリスト教関係団体に加えて若いパワーを中心とした団体がNGO（国際民間協力団体）に参加するようになりました。

一般市民が直接参加するためには1979年以前は宗教的要因が1979年以後は財政的要因が障害になっています。特に後者では、日本社会は個人ボランティアによる社会活動に対して積極的に寄付をする習慣がないため、若いパワーを中心とした団体は普通の生活を犠牲にした活動をせざるを得ない状況です。したがって日本のNGO（国際民間協力団体）は特別な精神構造の人達ができる社会活動という風潮ができました。

更に、この風潮を加速させたのが地方自治体の国際交流活動です。地方の国際交流活動を地方自治体が主導的に形成していった歴史です。地方から海外に対する動きを「国際協力」でなく「国際交流」へと収束させたことです。「国際交流」を地方の主役にしました。そもそも地方自治体の活動は「自治法」に規定されます。その「自治法」には「国際協力」の概念はありません。国際協力とはあくまで国家間でなされるものなのです。もう一点決定的なことは地方自治体の国際交流活動は第三セクター方式で運営されていますが、地方自治体自体が国の法律で運営されており、国家間の正式な交流のないところでは活動できないという事実です。したがって、いかに地方自治体の国際交流活動が盛んであっても国際協力活動には発展しにくいし、ましてや本来の意味でのNGO（国際民間協力団体）育成は不可能であるということです。

では、いかにして一般市民のNGO（国際民間協力団体）を通しての国際協力への直接参加を可能にするのか。

私達は7月から8月にかけて実施したタイ国からのチャムロン氏を団長とする農業研修団の受け入れ及び支援体制にその答えを見つけることができます。以下その実例を述べます。

アジア医師連絡協議会がこの農業研修団の直接受け入れ団体、高松農業協同組合が研修の受け入れ団体そして岡山県国際交流協会（第三セクター）と岡山青年会議所がバックアップする構図でした。これらの団体を基本にした動きに多くの善意の市民が集ってできる範囲で支援してくれました。この動きの決定的なことは高松農業協同組合が研修受け入れをしてくれたことです。高松農業協同組合は有機農法で岡山県では非常に信頼されている団体です。その団体がボランティアとして動いたことが一般市民に大きな衝撃と安心感を与えたのです。この団体ボランティアの概念が重要なのです。

日本の地域コミュニティは伝統的に町内会、婦人会、老人クラブ、子供会など地域諸団体によって運営されています。地域コミュニティの住民は義務としてこの団体に所属して地域コミュニティの運営に貢献します。即ち個人ボランティアより団体ボランティアの形式が日本人には心理的抵抗が無いのです。

結論を言えば、NGO（国際民間協力団体）は団体ボランティアである地域の諸団体と国際協力に向かって手をつなぐべきなのです。これらの地域の諸団体を通して一般市民の国際協力への直接参加が可能になります。もっと大切なことは、地域の諸団体及び一般市民の協力は単なる金銭を越えたものがあります。国際協力に必要な地域にある社会的資源が活用できます。

この時点でNGO（国際民間協力団体）は組織の変革を求められます。地域の諸団体はNGO（国際民間協力団体）の社会的信用を求めてきます。NGO（国際民間協力団体）は趣味の活動ではなくなってきます。また地域に生活の根をもたない若いパワーだけの団体では社会的信用は得られません。地域で職と家庭を持つ生活人が参加でき、しかも地域の諸団体と日常レベルでの交流の永続性が求められてきます。

現実的対応方法として「岡山国際協力機構」が発足しました。これは岡山から国際協力する人の輪です。NGO（国際民間協力団体）と地域の諸団体との接着剤の役割を果たすものです。

最後にNGO（国際民間協力団体）活動は個人ボランティアの集合体活動から地域の団体ボランティアとの連合の時代が来ており、それに対応した活動が求められていることを提唱をいたします。

1992年(平成4年)8月26日 水曜日

発行 岡山県国際交流協会

# おかやま オピニオン

チャムロン氏を迎え  
心と心通わせよう  
先月、タイのチャムロン氏一行が有難無難な旅の末、岡山県国際交流協会の研修生として、私の住んでいる岡山市高松区にいらした。私も二十一年近く、水産、家庭科を履修無事卒業して、農林業で働くことに決めた。今年、チャムロン氏一行が来られたことは、私にとって、大きな出来事だ。チャムロン氏一行は、タイのチャムロン氏一行が有難無難な旅の末、岡山県国際交流協会の研修生として、私の住んでいる岡山市高松区にいらした。私も二十一年近く、水産、家庭科を履修無事卒業して、農林業で働くことに決めた。今年、チャムロン氏一行が来られたことは、私にとって、大きな出来事だ。

分らない方の世話を焼く  
て不安がいっぱいだし  
ながら、勇気を出してお呼び  
した。お会いして、外国人  
の研修生としてのチャムロン  
氏一行が有難無難な旅の末、岡山県国際交流協会の研修生として、私の住んでいる岡山市高松区にいらした。私も二十一年近く、水産、家庭科を履修無事卒業して、農林業で働くことに決めた。今年、チャムロン氏一行が来られたことは、私にとって、大きな出来事だ。

前パンコク知事のチャムロン氏を岡山市に招いて、アジア医師連絡協議会（AMDA本部・岡山市）の菅波代表は二十二日夜に開いた「チャムロン氏を囲む会」で、「岡山から世界へ」を合言葉に国際協力の体制を整えていこうという「岡山国際協力機構」を、八月にも発足させることを明らかにした。地方をベースにした堅実な国際協力の取り組みのモデルケースとして、注目を集めようだ。

「岡山国際協力機構」は計七人、八月後半に準備委員会を開き、正式発足させ、約二年前から構想が練られてきた。

菅波代表は「これまでAMDAが取り組んできたことを、より広い立場で国際協力に取り組んでいこう」と思っている。また、モハマッド・ライスは「私が初めて岡山に来た時は、外国人はほとんど見かけなかったが、今では街の中で普通に目にするようになった。それだけに国際協力の土壌は育っている」と語る。この機会に私の経験を含めて、素晴らしい活動ができればと話している。

8月にも  
**国際協力機構、発足へ**  
AMDA  
アジア中心に援助

192/8